茶道教言 上

へ13
2132
98

へ13
2132
98

98

序

河原院のもとの人ぞ。草ざまに其の趣をあらびたり。鄙に通ふ風流夫の通の事を是押ひ出でて。あるべきやの法度を定むるに。邪集の花柳の。楽を学ぶ仮名もの。執心の鄙ぶり。定めて。思慮すべき四編同じ事。姫様の御人の妹子なるべきの。

郷賀庵文庫

155

芸葉の高下よりあそこを賣りてきんかい
ゝとの虚ゝうそ出でこ様乃ちはの言葉をまろこ多
花は胡蝶ふ。あのよ様ゝをもそこのこ。ゆ。
ぞくくとぶ。おのるぶ間紙の私言あこ。時よ
一文字屋和助。なきにしもの〻ばの
こゝ様誹よある。世情氣質物語なのにおろ
ぬ虎のんこゝ言葉やこゝの。きん源かけく

序

序笑話しく。始終もおのゝどぬ恨
の事ゝ。書ゝ。鶴の真似は出る鶴の子。
序文をとゝふとも考へ。筆よりも下
手ゝもゝ。時代蒔門。流行事
毛不文のうへ。岩假名ちごのひゝ
筆つの新紙。中ゝ大序ゝを歌
情ぞ。ゝ。ゝ川源氏大夏次編

をすとこもとうぞくぬ。幕うち
月桂寺の鼓市をいはぐ物
こゝ顧忘雷。序びくきみ持の
狂歌をこゝろめて。

南仙笑の門人
多満人

十一段目夜打角部屋

黒助稲荷の祭禮もきのふの爰と暉めき
まるも醉うる湯豆腐の紅葉散〳〵
朝ぐふけりふも流〳〵と引きもとれ
そのあし〳〵花咲け山さんは雪ふうぐ
さし〳〵名代の新ふを喰〳〵深迄
乃仇うちなを至へいまぐふ解ぬ下メの
帯さくふくき居續の座〳〵きへ

おんと表づきうり亟ろうは思ふ十ぐんふ塩まとぎうぐけ亟
ぐ芸ろ亟は部の色ぐのトおひ〳〵ふりふ〳〵もみうふ
客あうて芸は亟ふよりつうどさとどのぐ亟ろれた
外ふぎりある客とゆまぐ又それもせくふは金の断ろ亟
ぐんアこをめぐひ目を皿のせうふ
しものるれうし〳〵もめうぐんのまん 亟 モニエまぐおや
おこそるん芸ん芸ん祇 亟 てもエふきくエとがあるアノ
芸ぐ客いはめあぐ 亟 アノ人さんいふやん所の
やうぐぎさ 亟 いうぐ亟エぐ 亟 大うこふ十
かふふるんなんとどうおろう〳〵酒を呑
るん〳〵てむんざいく亟ぐ亟 亟 いやみ

国で江戸ぶし紙から川へ出るか〔大ヤザキ〕アノそんな
なるほどこれはまず十莨さんへねしより外な
客人へおもとせんとおもくあいで粉んと〔亭〕丁寧
も莨な売ところまでせうじがいくぞきつとたんと紙
いるかどこと莨なちよつと来て見る事ちないいこく
ゑじや　あいそでくもくあとくろうらのそとびしつなな
そろと其事うじ紙形く屏風の内へ数というじほど
めのいまで十七八のうてみといふ其んぞうるりきうなもう
おうふんなよくなのあるをとうし身のおよぶおうろうな
あふだはあんぞうあい直におろうなでもふ紙
まうちてるへなとく見られるならら〔ゑ丸〕チヤ直さん

おひまりく〔亭〕うてみさんろ〔とう家〕チヤ　さんらも
ごせうご祝工〔亭〕世辞な一ぷく吸付でもつまされ
あるやエ〔ゑ丸〕おのとさんの留守に来てく浮名
でもたてらまでへるりいせん〔亭〕そふして思わせ
ぶりな事くわるのうてなエるふ莨な角をえや
させて見くエがそれちて打越があるといふぶろう
〔ゑ丸〕そをきがれんるふごせうご粉ぐさんとなエト
いくなぐふ直なえつるきせるへ吸付出す　そだわよんらく
その手を直なえんつらんで引よせる

ねイさと蓋さんが来るんしゝ時ゑるふ和ヤコセ
わゝゝるんしゝふぎけさ州去ゆるヨ 虫 てゆエぐ
ゆうるゆゆ紙去んぞうゆしてとゝん廣澤ぐ
書ゝ小便益用とゑんさゆうるゆのでいつそまゑと
きまいふゑろまてくゑゆエとせうゝそまもさき
ぐゆゆつぐ紙ゝ 可 つうまきて虫ちうゑ紙
来るんと度ゑるゝ紙いぢわるんとるんぐちゝ
いきんせんでも兎ぐちうゆゑちるさから

いきぐとゆうとゆ知てねイさとゆんきるとぢふ
してゆふんるんと虫ぢうとゆもぐうさ祢エモ
てゆエぐ猫三すゆゆうゆ おエしもうゆ足
いきゆり とゝゆとそぐそうり
ゆけうり そんるゆふびうゆとるとん祢エ 可
モうゆんふ胸ぐどうきりゆくまゝるヨ 虫 ゑりへ
とでも去やァしゝゆエ 可 ゆざまいとゆ引いく
むちうふかんざしてゆるま紙 ちゆと虫ー
うきぢまるしゝうちゆり 虫 ゆぐれ来ふふ
祢ウ去ゆう祢エぐあゝく這入らつしまゆさと

とのさんハあるがまゝ女もいゝぐらしい君やァ孫七
〔てる〕わづかと既しても詮ろうまるんせんいうイ
ひとりふせりイせう〔直〕とんやハきみくろ〔てる〕
いてエさいくら独りが乏ふとんと気くく寝のさ
〔直〕おまへが孫ふあるうがとうへ孫る〔てる〕ほどのへや
エさ　トいちあがり　ちまうでエヨうし　トろうさうでひとう
そでゆく　ご挨拶ゐるがら
孫むそふる来り〔千代〕おいらんで孫ヤイせ
出入今積がおとうりイしうろふよくなると

まいでイせから淋しいと孫さくおつんなんしッ
さ　トいゝるがらう巻の草そうしとよみ〔直〕ともはく
なぞうつの内ハあやしく孫のりより　のぶ
寒かろうふ　トいゝるうち障子をそつとあけし
廊下の八けんハつまるくも又めうりよぎさまど
せんハまんと孫しがまりとう雪の夜半ぎらりそろハ
わしらもひめる思ひのもとの新屋まゆうじ紙そつと
おしあけてのぞけバ内ハあらてなひとりがまゝる〔直〕あゝう
孫もゆうぬふせいふらく直までいれとりおふて
出くく寝のんくる君んせう紙〔てる〕無てせ紀和ら
孫　寝もせぬまりくねしまるが芸者さんふみえく
くやしがるこし紙せるふしておんなんを

とりよきまをうをかりきるん〜 [西] そりやまを
るとぐ〜さんこらく〜ふある碩学をとりよせ
さ〜〜〜とりのそるさびらそるよろこび
[そな] ふさん斗りてきひろざんせうかわり〜の
わ〜いつるく〜〜るん〜〜〜るトのふ絃きろう
屏風のそとり大きな けふたあざきろう
とくふく〜がぐつるく [男] モシエ〜〜かいらんれる絃
るんす恵さんいはそこの新やでせうるをして
ねさろ表をるョトのふちふきんぞふひろどや〜〜
より集り [生] ヲヤく〜り〜〜かろ絃を西きんマア

あるるこのぶきるそんるまを生悪せうるるとさヒッ
てかいらんの新ぶたちまをどるのろ [西] かぶむ
からを紙しづろふく〜 [生] うてるさんもどう
いふのぶのふ [そな] おげろふ〜てかいんるんぞん
ぶきんぞうでも安郎ふニッいるを西んこう解る
からかいるちもいきぶ〜さんまを若西きん
けきををうのとふりふけをとつけくかいん
るん〜 ニういぶろうよりて
べちをくゆほをまべ [西] コしサこんるおげ

うふかぶく〜 [き] るんぶ〜ろれ茶屋をよんぐ
相談いろ〜ませろおらんがおちついておろい
あるから行ぐしぐろしいそめうちよぐきろ出ろ
きせろとおもろ [金] 今月今晩大成就あり
金のあふ見をきば
ぐるいトゆ〜いろ〜くゆりしも書の若れ
平ろう倉さんモウゆろりでゆろうでご出ろ
ます [家] いく所ろてあ正はきを出ろうをめりく
いろろ〜もとゆ〜ろぐんれの伯ひ根

きく出きゆ [平] ゆ〜とまりまり〜ゆ尾と
庁ぐ出をりゆ〜て廊下とかけらぐすひゆろ
浅草寺の七ッの鐘コヲン川
泉覚寺の段
敵打の角部屋の幕へ引ク〜とりて乃
見へ品川ゆろりてメ又ケくの亞又魂香のき
ぐく蘇生ゆろ三の甲七臣の服を切くぐ臣ゆ矣の
金の一振へ玉場ゆ出ろうを立くゆろ〜

南品の館驛ハ三品式分

傀儡女の綿ゝかけく屋敷のゐト去来

ぐゝちゝ出さゝしゝもいゝ〳〵ぶゝとの敷ゐ

ら免今橋向ゝトよびるもひべゐり菟舎

の飯賣女ゐ敷ハ箸ハ向ハト訓ゞるとも

めゝまりゝハゝゐるゞゝハいるゝゝる當ゞゝゐ

殃や一す世界のゐりさゐ這入口ハ五尺ゐまりの

衝立と能遠ハ其内式ハ新屋と号し

さゐ敷ハ式ハ屋出ゞゝくの驛樓ハ極楽のてゐそう

三段ゐり彼四十七人の忠臣泉質寺ハとゝ、

未来の景紙得ん所も則地獄の汐汰も金ゞゞい

のいてゐゝんゝゐそも驛樓の三段い上品上生中品

中生下品下生なり石川の品いゐんと訓ゞて栗ハ

三ツハ品川ハ上中下の三段ゐる由縁ゐるゝさゐ敷ハ

平ゐゝ白良のゐゝぶ極びハ三段ゐる式ゐるべし

下品駅樓

扨部屋と号せる主人袖〜女の廣袖ハ
赤めちふつむくとゑんゐるちりゑんの
袷襦半ちりめんの色のさゝゝる袖帶ハ
まゝゝく馬轡ぐるのさけ烟艸入ハ銀金貝
の鎖ゑぐく尾ゑくくうつゆうハぬら
さげゝり扨部屋のゆゝさゑゑト号せるハ
年四十ハちゝく百金のゆゝりへげて髮ハ
麿男猪眼中ぎろりくとてをゝゝ

ありしぬちりめんの額ひくのハ袖ハ男帶と
おゆゝる上く黒紬のゝちゝ紬ゝゝとり大八すの
ぜんハ婦夫向合ゝり膳ゆくゆ〜紙ゝゝゆゝ
とゝも長火鉢ハ焼鍋とゝけさゝ〜ゑの白ひ
ゑん〜くと塩ひきの実貝を煎ゝるゝゝ〜紙
つゝとんぐゝゝるゝり但〜喜撰の粉の煎ゝる
のちゆ漬ゝり側ハ給事ゝ〜く居るゑハ髮
多家ゆく毒断さひちゝゝるゑハ婦夫の

給事とまりがぐふ咽とぐびとくとうふ〜
間うるときうるゑ癬疥の膿とぐ〜〜うりうり
ちうるあうちゑくゑ幕明

なやう あゑちてゑいふ膀ぐ膿ぐてふび紙ぐ
ふきうやナ乃せエあると癬疥と虱をめうやケそびゑ
ちうるきうるふのゑふくの茱萸呑きうるうる左茱萸
るくび祐エさいうて出うるぐいく情〜〜く茱萸
呑で出くゑ〜〜ん祐エとうちうつまう〜〜祐エ金

の出る茱萸ゑやぐうくは若ハ醤者さゑのん奉公
とまるちうるゑんぐはうるもてゑエぐゑ袋ぐ来てゑと
云ぐうこ祐んも入てゑゆぐいと國〜ゆりてエとうち
ぐゑゃァ祐エうよいくのゑゆぐいふぐんぐうきゆ
ゑふき茂ゑうくゑちゆァてゑエもゑうう去祐エ
という祐エゑよちうとこん去ゆうゑ意事とぐすト
病もこゆくよくるゑんぐてゑぐゆうう者が切でも
うせエぐふぐうう〜〜さゑんぐうう切とゑ為ゑうり ゑいふァ

てめヱがやうにやァ東銭でおやゝくらゝ出る
銀の三ッや四ッぐらいでも守袋にはいるめ
ご中長屋の御守りと出きてからにやァ意
ぢごつゝぞんでなうさんにもまけるんで
めヱがおふくろさまが女郎づくりも志
私ヱめのかゝざ又弁りおのしてるげんなく
此女郎らんくとひいらきらふく茶づけ銭らう
こんでん銀の器で茶碗のふちう銭らのしゝるうらう
に女郎まうしく小言をのらうらいらずとうぜん
物をせ銭ぐせぞおかもゝおもの手をうの銭あげるまり

[女郎]そふそてんやてめヱハおれにくされ女郎だぜ
私の天神さまが贈火が志くやうに横じ私
形にそうくまでヨォぶさうさのまりイ[息子]つまらさ
しやおいぞにできさ㾮のふりの器物く
つれくいくってなりもゐせん[女郎]それじからう
お補宮を紙へのぞいてそれといふの不覚
さなんまでおるせうのかけく[息子]何さおかまや
りなし さうふりに紙へのぞいてあそりますさ

ゞ私ハ知ラヌトカンニッキクッテアリマセ
んそふしてるものごさいます骨董でございます
かくしまして 女ガラ 嘘をゝりつをゝやがれコレ
史郎の引出よ賞さなんぼであるものを 客ち
それぢゃござりません 女ガラ そふして何を
つけさのご 客ち あるくのゝ蠅張の
中ふあります すのを有ました 女ガラ 何骨董
蠅張へ入くをくりのう 客ち それでもござ

ひますりの時 客ち 曲りのふあるのうコリヤアトイク
ひいぢせぢ記こうもの ちあるみくくなるけさくぢ
ゆうなアコリヤアあ屋敷の密人ふもらんやさ
蠅螺子の塩辛ざアなりんそさるらゝひ記
ハ拾私ェけ申アるゝ私ェコリヤアム良物ざハナ
客ち それでもあさんのいるんまゝふハ
やけどあもいとおいなさいまゝさゝ 蠅螺子の塩
かゝんけど
まあゝあり どうまてあんまりまゝてあんかゝ

へゞ〜て拾ひ〜さら物がゞ〜〜さ物へ霊
螺子の塩辛ゞをといふことをよく考へて有り
よ〜た 安がう おへ紙ニて紙ハた紙ゞをいく
せおひのゞョ目ゝへの時へそん犯馬庶でも
すゝめゞどうをでおもくゞゝうゞ金がゞさ
ゝ〜ゝをちんゞチッ〜をとうふるれョはまも客
人のお〜ゝとめるふハ陰付ゝりつ紙ゝゝり
く庶ゞゝを〜ゝゝと立へ客人の肩を陰切

て血をゞ〜て客人へ狼紙ゝんゝゝ中うる女郎
ゞをいゝくゝゝも紙つゞ〜て久ゝるゝその赤く
ゝゝゞんおへ客人の客を引ゝかく猫をゝんゝ
ゝうゞゝ服をゝゝせるそのゝ人年妻の客人
がゝゝゝかゝかあへゞ〜ゝるゝゝうふ豆紙ゝゝめ
ゝトゝへべゝゝのゞゝる客人の豆紙下ゞめでゝ
ゞゝて扇へへ引ゝゝゞ〜てけゞをゝゝせゞは
おんみくゞゝゝゝゝめゞゝゝゝゝゝゝ源七

ぜん居の衆の客人へぜふーーらのふのご 源ひ
ごろんかうめーーなぐせとやまず 寄 ケあり
うなーーひ雪ホハあるうーでたふう紙めーー
て冷服ホ沢居の切端でも付てうもるぐ人
なつもくいりさ者ハうめんぐ歩来てふう 源
ヒへあの二人りの股引を拾てのさのーーた差
ねぐうーモウ人りてせう 寄 コレあうそぜん
今月八ヶ年トセぐこの去なへのうぐこ紙者よ

十六

ぜんあるる人ぐ元ぐうーーなせんヨおむ
らるんぞへ今夜山の客人うを安るそ
うだむうのあれ去んちんぞへいくこと
らさぐ行ん時の去ぐこ有ちりめん三ツ
うくつと先ごこりんぐうへ厨で雷子
の帯ホ去こそふぐその客人もホ人の頭去
らで二面ぐいかうあふもを引とるそふぐホ
んホ去雷子でホ去ひぐーた天を前のふる

十七

ぞくのあり通ぶたちん乞ひ拾てとい
てくださせよそこで傘屋ふの且那の
ぶ姉の目ふさまりまーさいりてくださへ
よまぐ勘用がある仙屋へまつてきすふの
利へ屋るへ公者さまやそふーて伝さんの所い
りてい塩引があらへんとーるせよとこんるー
きれやよあんよもー今紅金板の方さんが
おまわさんと婦変連て大師川原へ参るとい

つくく通ふりまーさ且那ふくいろくく豆乞
といくまーたあまわさんの姉へまア仙屋ふある
さあいらアあ那ニいりたのうさんざとふくへ豆
あんふ仙屋でおひ出ーさ松番屋のお爺ぶ出
入りふ仙屋のまんまんがむづーいくらお豆ふにをい
れてくまろといふがアリヤア尾持がかくざの棒
ざくらあくあもやさでエおざてモシ来くらお用
むさで出さといりてあるあ[弁ら]そーておめへ

ぞろ〳〵やく 豆 屋根や ヨ 女房 よ〳〵 祝ヒ ヒ ふのく
せよそれをろうけふ 鼻毛をのぞきろ 豆
ぞれれ 茶碗 あそろ 腰くふよ 豆 むろうであれ
ふ延てあるく 女房 だ 豆 されかうと思ていくろふ
あるつても女ふのろく 胴巻ふ金ぐいくらあるゑ
トいくぞうふと ろうくまとゐまる 豆 ふせろとぞつてく金くろうくと二分
ぞ 女房 あぞうまとふあるあそろさんふあろうを
ちつてあまぞう 引 たろうくかんざ〳〵 祝うたせ祝

ゑけりゆてあるく祝ヒ 豆 コレサよ〳〵やトいふのふは
べらぞうあくト祝ヒ ヒ おとし
かんこーいちぞう 横ま掛け 長ゑさの 煙草を だぶ〳〵
だぶ〳〵〳〵 表よハ目ゑざんからぐる伝馬の 内のろうふみむろいく
〳〵ろ〳〵 大根かつけくるろくふのあ 女房 でくと
〳〵ぞ〳〵 百五十ぜあろうア買てく
ゑ表ッあろうまろ〳〵 祝ヒ 番頭のあ 番 鯛ふ鮮ふ
番が 煙草ふ魴鮒 今日ハろろ〳〵 茶碗 さんうた
のかゝやアなたシハアり十ニダワコダハ〳〵 茶碗

ハイホイ〳〵〳〵エイ

安名手本執心廓四編上終